

〔史料紹介〕

錢屋関係書状（「滝屋文書」所収）について 其ノ二

小笠原 二郎

はじめに

昨四十二年本誌四十七号に標題についてその才一回分を發表したところ、其後、二三の方からはけましやり者、侵やらいにだいたなので、其後一ヶ月の調査をまとめ、貴

めをふさぐ事とした。

この度の書状は才一回分に比べ、いささか二番煎じの嫌がないでもないが、錢屋事件の前後措置をどの様に講じ、どの様に局面を打開して行ったかをうかがえる資料として海運史上の意義はいささかも減するものではある

全十一通。淺屋善五郎あて書狀の内訳は別表の通りであるが、出人の内訳は本津屋四郎兵衛五通、同校八郎一通、安保瓦平治一通、加納屋吉兵衛三通、輪島屋与三兵衛一通でほとんどが錢屋子飼いの船頭となっている。従つて肉身同志のやり取りにのみられる様な一種の切實感は湧いて来ないが、交錯した貸借関係をどのように解きほぐして行つたらよいかを計数的に把握している事および、錢屋一家の経営は必ずしも一本の経理の柱によつて支えられてはおらず、その支柱が少くとも二三本あつたろう事この為め各船頭が、主家のおん為め々の大義名分をかか

11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
銭屋	加納屋	輪島屋与三兵衛	加納屋	安保	〃	〃	〃	木津屋四郎兵衛	木津屋茂八郎	木津屋四郎兵衛	出
吉兵衛	吉兵衛	吉兵衛	吉兵衛	吉平治	〃	〃	〃				人
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	滝屋善五郎	受
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		人
〃六、一、二五	〃六、一、二五	〃三、十二、五	〃三、十二、三	〃二、七、一〇	〃二、五、	〃二、五、二五	〃二、四、二六	〃二、二、一二	〃二、二、一二	寛政二、一二三	発
〃六、三、二七	〃六、三、二二	〃三、十一、九	〃三、十一、九	〃二、七、十二	〃二、五、十八	〃二、六、十四	〃二、五、十五	〃二、三、十五			受
											信

書状のあらまし

(1)では錢屋昆助の身上にふれ、事後処理については万
事滝屋へ一任すると述べ、(2)では事件の判決が相当裏引
くであるう事を予想した、(3)では再び昆助の事にふれ、
更に津輕・南部領内における錯綜した貸借関係の処理や
調整を指示し、特に昆助の蘆苗趾の取り扱ひを重視して
いる点が注目される。(4)では田名部山本利左衛門の帳尻
について再び触れ、(5)では昆助個人名儀の取引の決済を
特に重視している。(6)では繰り返し滝屋に金権を委任す
る事を強調し、(7)は三瓶(津輕)の安保昆平治の書状で
滝屋・錢屋と三者間の決済方を依頼した。(8)では加納屋
吉兵衛は事件が長引くと共に経済的にピンチにおちい
た事を露呈し始め、隠密に地下運動を始める事をほのめ
かし、(9)輪島屋は別の角度からこれを裏付けしており、
(10)では加納屋は広汎な範圍で事後処理について滝屋に依
頼している点圧巻と言える。又錢屋木部叔放祝いとし
て詠進された久左衛門が牛ぶらで来た際、加納屋の意機

の処置で恥をかかずに済んだ事は興味深い挿話と言えよう(10の注記②を参照)。(11)では平内山(黒石組)出羽木六十石の処理が目立つ。以上を通じて言える事は本家昆太郎の影は急激に薄れ、昆助の存在が大きく上つて来た事だろう。

おわりに

以上十一通の書状は前号(四と号)所収のもの、様に発信年号がはっきりせず、一〇、十一の二通を除き他は推定に従った。あるいは間違ひもあると恐うので、おぼろぎの点はなぐなりと指示と示教をたまわりたい。

附記

滝屋文書についてこれまで筆者の発表した論者の内、昭和四十二年以降の分は左の通りである。昭和三十八—昭和四十一年分は本誌四十七号十六頁に既報。

昭和四十二年三月刊「東奥文化」三四号
昭和四十二年六月刊「国史研究」四七号
昭和四十三年二月刊「東奥文化」三六号

(1) 本津屋四郎兵衛書状

一筆啓上仕候。余寒難去候処先以御地御家内様初御店衆中益御万福日出度珍重御儀奉存候。次ニ当方無異儀罷在居申候間乍倅御安意思召可下候。

時ニ毎度昆助殿之義ヲ以御念煩ニ御尋ヒ下難有奉存候。同人も無事ニ罷在申候間此後御心易思召可下候。乍倅何れ様へも宜敷御礼程御伝ヒ下度御願申上候。且毎度御取計之程御世話御成ヒ下難有仕合奉存候。此度吉右衛門殿秋田へ御積ニ下り、就夫御地様方へ御挨拶方々参上仕因ニ御座候間何角御世話御成可ヒ下御願申上候。何事も御尊家様方へ御任居申候。何卒御取計御添心程御願可申上候。

書面ニ御書究難ク故同人より奉細取可ヒ下御願申候。万端懸御目御礼程可申上候。

猶粗末之品ニ候得共菓子式箱差上御入手可ヒ下右者御永旁早々以上。

正月廿三日(安政二)

② 本津屋四郎兵衛

滝屋善五郎様

直而御願申上候。私并吉右衛門ハ昆助殿ト思召可下候而御取計御添心御願可申上候。以上

注①錢屋五兵衛の四男。長男昆太郎と共に永年。しかしこの判決は嘉永六(一八五三)年。しかるに右文中「同人も無事に罷在云々」とあるから、この書状はそれ以前とみるべきか。

②天保二(一八三一)年当時宝施丸船頭。

(2) 水津屋茂八郎書狀

口七郎右江門便＝一筆啓上仕候。少々長閑に相成申候処、先以御全家為御荷益御壯健と遊御座珍重之御儀奉存候。然者先便市蔵＝申上候通、口七郎右江門義八百石積志艘上方より衆出シ申候間、右中荷物水急御儀と成下候奉願上候。式番衆下も御地へ指下シ申渡奉存候間、矢張米御寺可ヒ下候。猶受書七郎右江門より内外共御聞取可ヒ下候。就夫次船下り物之義も七郎右江門へ御指図ヒ下渡何事も賣店様御便＝御座候間、宜敷／＼奉願上候。主家も彼是と長物＝相成諸雜賣方＝困累居申＝付色々示合細々と人目＝立不申様＝いたし入用方之引足＝もと最寄／＼＝仕懸申渡此組＝御座候間、不相交御力添ヒ成下渡偏＝奉希上候。右申上渡以取札如此＝御座候。早々、以上

二月十二日(安政二)

水津屋茂八郎

室屋善吉

錢屋治右江門

滝屋善五郎様

同 善蔵様

注の嘉永五(一八五二)年錢屋事件発生以來一年を至てなお今後も事件が長引くらしい事を暗示、この間隠密の裡に再建計画をめぐらす幹部の苦心がうかがえる。

(3) 水津屋四郎兵衛書狀

一筆啓上仕候。春暖之初ニ御座候処、先以某御地御家内様御荷益御機嫌能御座ヒ遊珍重御儀奉存候。次ニ私義も無異儀罷在居申有様御安意可ヒ下候。

然ハ毎度御紙面ヒ下難有仕合ニ奉存候。他又御面談ノ上御礼申上候。乍憚何れ様御伝言可ヒ下候。且又昆助殿、今御免も無之候得共、同人之事ハ早々御意有之候哉と奉存候。左候得者諸事品物ハ私方へ御渡シ相成諸方之人々色々咄シ致シ候得共、同人之分ハ永々事も無御座此段御心易罷召可ヒ下候。

一 先産而田名部山本利左江門様方へ預ケ金子之義三百両と申上候得共、千両之内五百両者昆助殿之分ニ御座候間、何卒此分御尊家様方＝御主人様之預り金子と御振替置可被下候様御頼申上候。

一金沢忠左江門様ニ金子貳百両取組置是も御主人様之金子と御振替置可ヒ下候。

一 黒米御印千俵之代滝勘様之味噌代是も御頼申上候。

一 弘前福岡屋幸助様荷積下り敷金貳百両但利足ノ分、右ノ断ニ御頼申上候。

一 御地川吉様へ船志艘頭ケ置売代金并ニ荷物代、是も御尊様方へ御諸取被下候様御頼申上候。

一 子ノ年兵蔵殿積下り之荷物昆助殿ノ分ハ是も御尊様

方へ取集置可下候。

一 御地弘前而所商人様方へ正金売物代金御座候間取引之義ハ兼而相頼置御承知之通取集可下候様御頼申上候。

一 ぬき出シ目録ハ昆助様之分ニ御座候間御心居可下候。

一 此外之分ハ御尊様御承知之事故不申上旨敷取計可下候。

一 昨年七五郎殿借用致候金子百五拾兩私方へ請取置申候間此分ハ助殿金差引置可下候。猶又当事私儀之方ニ金子入用モ無御座候間何分前書附之通り振替取集御尊様方へ預け置可下候。御頼申上候。

一 御尊様へ昆助殿預け置候にんす并道具共誂様御尋取何様而モ一切御渡之義ハ堅く御無用ニ御頼申上候。追而私義罷下り申候。

一 橘屋清左江門様方モ御尊様方御差回御頼申上候。

一 此度三津屋与三郎殿罷下シ候間可然荷物有之候得者宜敷御差回被下候様御頼申上候。右前書之通り宜敷御取計御頼申上候。

二月十二日(安政二)

菟屋善五郎様

水津屋四郎兵征

注①永字が解けたのは安政五(一八五八)年。国史研

四七号所收拙稿中ハ另銭屋昆助書状参照。

② 山本理左江門へ貸金三百兩の件については国史研究四七号所收拙稿中另水津屋校八郎書状参照。

③ 「ぬき出シ目録」は昆助に直接関係する債権債務にかゝわるものと思われるが所在不明。

④ 菟屋へ昆助が預けたにんす、諸道具類の中には事件の鍵を握る文書も入っていると思われるが、当主善五郎氏からはこれまで聞いた事はない。

⑤ この書状に認めた銭屋方の債権は次の通り。

山本利左江門	一、〇〇〇兩
金沢忠左江門	二〇〇兩
黒米、味噌代	?
福岡屋幸助敷金	二〇〇兩
川吉、船志艘外	?
青森、弘前貸金	?
七五郎借用分	一五〇兩
橘屋清左江門	?

(4) 水津屋四郎兵征書状

一筆啓上仕候向暑之砌ニ御座候処先頃其御地御家内様御揃御機嫌能御座被遊珍重之御儀奉存候。次ニ私共無異儀罷在居申下憚御此易思召可下候。右憚何れも様御伝言可下候。然者与三右江門殿此度参々況へ粘積入今日当表へ入船仕候而御紙面之義拝見仕候処、何角段々御世

話被下難有仕合ニ奉存候。且又何卒紙面之通り宜敷御取計御頼申上候。

猶又只今之所急ニ罷下り不申候得共何分御尊様ニ万事御仕申上候間何事も御面談之上御喃合申上候間左様御承知可ヒ下候。

一 田名部山本和左江門殿金子之義与三郎殿御申越も被下候処取立六ヶ敷事ならハ当受之事故振替ニ御頼申上候。并振替之節ハ親方様と唯様御出可ヒ成候得共、昆助殿出立之節差圖之図り帖合可ヒ下候。此段御承知可ヒ下候。

一 与三郎殿ニ御尋被下候之式十面之御手形之分ハ親方様方へ渡シ置候間左様御承知可ヒ下候。右御礼旁申上地斯御座候。

四月廿六日(安政二)

水津屋四郎兵江

滝屋善五郎様

向申上候。然ハ小酒屋引請申候間当耳ハ罷下り不申末春早速御地罷下り申候間、可然荷物御座候得者御買付置可ヒ下候。

(5) 水津屋四郎兵江書状

一 筆啓上仕候。薄暑之節ニ御座候処先以其御地御家内様御勘益御機嫌態御座被遊珍重之御儀奉存候。然ハ先達而清盛殿ニ元元丸送り被下候ニ与入難有奉存候。乍憚何れ

様も宜敷御伝言可ヒ下候。

一 此度与船吉太郎御地差下シ申候ニ付宜敷御頼申上候。就夫先達而与三郎殿申送り候義御承知被下難有仕合奉存候。

其後弘前三兵様ノ便リニ紙面夫々書付申上ヶ候ニ付此度〇敷不申上候。左候得者御尊様御存之通り黒石様と年々昆助殿方へ式百俵宛渡り米之義ハ御主人様差引ニかゝり不申候得共何分かくし置可ヒ下候様御頼申上候。就夫何れ御主人様を御地方へ手代被八殿并三吉兵江殿兩人之内吉人罷下り候故、若昆助殿帖面相しらべ候哉等私モ心へ候間あんじ居候故急ニ吉三郎差向候。同人相見之上帖面御しらべ古黒石様渡り米式百俵并先達而之^{振替}其外悪しき事御座候得者眞差御戎可ヒ下御頼申上候。何分御尊様方へ万事御仕申候間昆助殿私ニ戎かわり宜敷御取計可ヒ下御頼申上候。

且又橋清殿方も御差圖御頼申上候。右用事旁申上地斯御座候。以上

五月廿五日(安政二)

水津屋四郎兵江

滝屋善五郎殿

追而申上候。輕少之品ニ候得共菓子一箱相送り申候間御手入可ヒ下候。

注①「昆助殿方へ式百俵宛渡り米云々」は錢屋一家に別途會計に屬する貸借があつた事を示し、至當においてもかなり複雑な關係が伏在する事を暗示する。

(6) 本津屋四郎兵衛書狀

別紙申上候。

一 子ノ年五月迄下り物入役不殘昆助殿方より置候間預り物売仕切ニ認メ候節ハ仕切表之御役錢ハ不殘御尊様請取置可ヒ下候。子ノ年夏下シ注文地染仕切認メ之節当り前御役湊入役御差引過錢ハ御尊様請取置可ヒ下候。

一 宝圓丸宝銀丸兩艘子ノ年秋積下り荷物不殘売仕切認メノ節に當り前御役湊入役御差引過錢ハ不殘御尊様請取置可ヒ下候。

右式口等善引宜敷御承引成可ヒ下候。

一 前書付下ノ物預ケ之品ハ仕切表御役ハ不殘御尊様へ引取御預ケ置可ヒ下候。

一 北田政吉殿酒造り方ニ金子貳百兩余取替可ヒ下候。請取方六ヶ敷候得者主人様方へ相廻シ候様御願申上候。且又此代金御尊様へ預り置可ヒ下御願申上候。

一 御主人様之手前之分ぬすき残り金ハ丸佐殿あわす殿近跡殿金印釜印其外小口共宜敷御取計可ヒ下候。前書之通り何卒昆助殿私義ニ成かわり候節宜敷御願申上候。

右早々如斯ニ御座候。以上

五月判日（安政二）

竜屋善五郎様

本津屋四郎兵衛

注①宝圓丸は天保六年合船船頭昆助十三人兼一、四〇〇石。宝銀丸は船頭竹松屋長右衛門八人兼七〇〇石。

②ぬすきの竜味ははつきりしないが、「のき（除き）の書き誤りか。」

(7) 安保比平治書狀

一 筆啓上仕候。殘置之節御勘御實健ニ遊御座奉恐尋候。当方無異罷在申候御安慮可ヒ下置候。

一 加州錢屋宿当所齊藤久次郎殿私方へ賴合ニハ此度孫六殿当所毘布へ罷下候処懸方不寄ニ付私へ百五拾金用之之義賴合御申候得共此節金配甚迷惑ニ付兼而錢屋昆助殿へ三百五十兩預ケ置入用之節ハ尊宅へ申上候様申置候ニ付御願奉申上候。尤孫六殿へ錢文々々承狀ニ者若懸方危慮間ニ今不申候ハ、取替之義も賴合ニ御申候。隨而此飛脚へ百五十兩御恩借ヒ成下度奉願上候。齊藤久次郎殿も可奉申上奉存候。宜御承引ヒ成下度奉願上候。恐惶謹言

七月十日（安政二）

④安保比平治

滝屋善五郎殿

尚手形を抄事差上候。以上

則日

注①津輕三厩湊の回船向屋

(8) 加納屋吉兵衛書状

飛脚市蔵殿儀ニ付

一筆啓上仕候。時節向寒之御御座候処、先以其御地御家
因様御勘益御機嫌克可被遊御座目出度珍重之御義奉存候。
又ニ当方無異義罷在候向々俤御休意思召可ヒ下候。然者
此度御店致八部様御用向ニ付遠路之処御登可ヒ成段御苦
痛千萬奉存候。

就夫御丁寧之御紙面御送ヒ下候段、誠ニ難有仕合奉存候。
而而重役共々も宜敷御礼申上候。左様思召可ヒ下候。向
亦先達而右御注文之義ニ付、片舟占右江門殿態々罷下り
候向万事宜敷御添心程備奉存上候。

一 兼而御心配ヒ下候主人共義も益御機嫌克相暮シ可ヒ
成候向々俤御休意思召可ヒ下候。就夫此節者大分評判宜
敷候向來七月迄者出宰可ヒ成候風節御座候向一統奉祈念
候。

一 私儀も年々無商売ニ而相暮候而も誠ニ手前計不都合
ニ相成候ニ付依而來年ハ心當船も有之候向々艘兼出候事

ニ約定仕候向々内々大坂表罷登候向ニ御座候。就夫明
春早々御地罷下り候向、何卒其ノ節ハ御添心御引廻ノ程
偏奉願上候。依而御地下リ物模様并店方御注文等有之候
者向人ニ御申越可ヒ下候。是亦其々奉願上候。

然シ此義ハ私切ニ而内々申上候事故、決而他言申上向敷
候。余ハ明春御拜願之上委細御咄申上候。何卒今一度重
役共口口之上ニ而主家取立度存念御座候向御尊上様ニモ
御力添さレ御引立程幾重ニモ奉願上候。此上ハ何方も御
添心預リ度候向吳々奉願上候。

一 此度以連印輪島ニ様取組為替之義何卒御面倒無口
御渡可ヒ下候。偏奉願上候。尤わらば様義ハ内外御存事
故内通ニ而誤合有之候様無御座候向何分ニモ此度之義ハ
御難題御御消可ヒ成下候様偏奉願上候。

余者明春御拜願之節積御物詰由上様、右者御見舞旁々如
斯御座候。 恐々謹言

卯十月廿三日(安政三)

加納屋吉兵衛

滝屋善五郎様

注①長男毘太郎(安政四)次男佐八郎(安政五)四男
毘助(同上)の事と思われる。なお()の年号
は永享の附けた年。

②加州宮腰、慶長丸の船頭が

(10) 輪島屋与三兵行書状

態々飛脚市蔵を以一筆啓上仕候。先以寒冷相増御座候如
並御安泰奉欣願候。

然ハ当春佐助罷下り申候ニ付何角御世話様難有事存候。
且又此度下筋所々冬買附ニ下シ候間御地ハ当春モ左助御
松米節ハ為替ニ而御口口申上候。金子之儀ハ兵庫北庄殿
為替ニ下候ハ御渡申上候此度市蔵冬買附下シニ付貴
家様方へ錢昆殿代同人方々私ニ為替金七百兩致口口ニ
付押而頼無如右之金子相渡為替取組仕候間市蔵野辺地方
ニ而金子入用ニ御座候節八同人御渡可ヒ下候。若入用
モ無御座候ハ右三千五百兩買附米之内へ引去残り大兵
庫北庄殿為替ニ而御請取可ヒ下候様ニ御頼申上候。尚又
委細ハ市蔵方口上ニ而申上候間宜敷御聞取可ヒ下候様ニ
御頼申上候。

右ハ早々用事迄如斯ニ御座候。以上

十月廿五日(安政三)

① 輪島屋与三兵行

津屋善五郎様

追信申上候。此向モ弥八郎様御出願可有之奉存候。

注①加州宮殿、輪通丸船頭?

(10) 加納屋吉兵行書状

新春之御吉慶不可有際限御座重畳目出度申納候。先以其
御表御家内様御揃益御勇健可被遊御報求珍重之御義奉存
候。

次ニ当方無異義罷仕候間乍憚貴意思召可ヒ成候。然者
下拙義モ当九日無事着仕候間乍憚御安意思召可ヒ下候。
扱昨年中者長々逗留仕候而万端御厚情御引廻ニ預リ千万
難有仕合奉存候。右御礼申上度候。

一 此度主家御見舞として御代人久左江門殿直路之処為
御登可ヒ下候段誠ニ難有仕合奉存候。此段主人方モ厚御
礼申上候様ヒ由候間左様御承引可ヒ下候。夫ニ付御同人
義モ早速罷下可申候筈之処、彼是延急相成誠ニ御申上様
モ無之御氣毒千万奉存候。不惡御承引可ヒ成奉願上候。

一 昨冬御屑折ヒ下候御上様御下ケ金之義委細詔合主人
申上候得共、中々御聞入無之誠ニ困入申候。委細主家并
左助殿寄申上候間宜敷奉願上候。尤当五六月頃ニ者同人
罷下候筈御座候間其上ニ而御下ケ金之義モ御願申上候回
リ御座候間、其節宜敷御取次可ヒ下奉願上候。尚委細私
罷下候上ニ而夫々御咄申上候。

寔以私義而年罷下り候而貴君様之御心添ニ預リ不々及心
配仕候申妻モ無之、誠ニ殘念奉存候。此段御賢慮可ヒ下
候。

一 私義早登坂致度候得共何ケ用向モ多ク直之下ニ付当
月中ニ出立致度奉存候。夫ニ付船玉之義能代船モ年内ニ
買入不申候故誠ニ困入申候。尤七郎右江門モ船玉之義ニ

付極月と大坂罷登候得共未だ便も無御座候故誠ニ心配可仕候。極意者下地之船玉作事致候様ニ申置候共御地注文并ニ今津太殿引口賃四百兩計引請、外ニ荒毛の等ニ而都合千五六百兩計も積下シ候事故、下地船玉ニ而者無心元候故多分兼口候様ニ申置候取計可仕奉存候。

一 上方米相旗之義正月四日出ニハ加、米ニ而百廿八匁五分申參候得共、其後七八匁方も引下ケ候風雨御座候間、此未如何相成候哉難計、尤直口舟三百艘毛有之様様子御座候間右舟ニ登込候者多少者引下ケ候奉察入候。左候得者悉は八登船々誠ニ大ケ敷候奉察候。殊ニ御地米者外、之割合ニ高値ニ而引合ニ相成不申卜奉存候。夫ニ付旧蠟ニモ御談事申上候平内米之義モ河原殿ニ段々様子承候迄、五拾七匁五分直段相立候様子、枚々存外成高直ニ御座候。石様成直段ならハ相預可仕候者毛無之御本家御以直段と九半懸ケ之直段と式々五分下ケ相頼ノ間如何又三人江相談可仕候處、存外之高値、誠ニ困入申候。此モ右様之直段ニ而者上方引合ニ相成不申候間、此義罷下り候上ニ而委細御覽合可申上奉存候。尚付た大豆之義者上方モ追々氣配様子御座候間相成之口賃ニモ相成候奉存候。

此モの大元直段御座候間是モ口方人相成候見込御座候得共大ケ敷品米ニ御座候相考申候。

一 昨年預ケ置候玉砂糖之義如何可ヒ不候哉。何卒御請落可ヒ下候。式々七分之五月延口ならハ不殘荒可ヒ下候。当老はんニモ多少賣下し候事故下地之分丈者相度候

間宜敷奉願上候。尚又外ニ鹽拾丁焚込五丁有之候分何卒売込可ヒ下候。直段義下地直段口候事。少之処見計可ヒ下候。吳々奉願上候。

一 昨冬弘前ニおいて三金白三丁中白七丁都合拾丁買入候ニ付委細釜御印御頼合申上候而御地駄下ケ可ヒ下候。箱館表へ御送り可ヒ下候様御頼申上候分如何可ヒ下候哉、代金不足之分も金御印取替可ヒ下候様御頼申上候間、定メ御取くれ可ヒ下候奉察入候。尤箱館表売捌方之義御店為御任申上候而相成之直段御捌可ヒ下候奉察候。何分ニモ宜敷奉願上候。

一 塩麴之義阿弥殿と様子承候処都合危万五百世式本出来候様子段々御世話預候。誠ニ難有仕合奉存候。定メ代金も不足ニ付貴君様と御取りくれ可ヒ下候奉存候。万端御難題成義御頼申上候。誠ニ難有仕合奉存候。夫ニ付積舟之義モ河原殿并市蔵相談之上ニ而荒元ニ而相雇候御座候間左様思召可ヒ下候。尚口私共進口罷下候間宜敷奉願上候。

一 三兵衛之義引尻八拾七匁式分三朱ト永三分三ノ金子之義モ何卒御請落可ヒ下候而、罷下り候迄ニ者御取入可ヒ下候。

吳者右金子ニ付錢次殿ニモ申談モ相立不申誠ニ赤面可仕候間此段御覽處可ヒ下候而早々御取立可ヒ下奉願上候。

一 此間々左江門主家御祝義罷出候ニ付から手ニ而御見舞ニ御裁可ヒ成候事モ相成不申候故同人ニモ相談致候而

主家へも昆助殿へも酒三升鴨一置ツ、御祝差上申候向此段左様思召可ヒ下候。尤杉山々も売人御見舞參候ニ付同人之振合御見候処、誠ニ丁寧之直物參候ニ付尊者様方ニ而御祝之印酒看ヲ遣シ不申候も不調法奉存候ニ付久左征門殿相談ノ上ニ而別書之通り而家相遣申候向、此段不恵御承引可ヒ下候。右代金之備者私と御取口申上候向左様思召可ヒ下候。外ニ久左征門殿直中金不足ニ而金売而思取口中候向是また左様思召可ヒ下候。

一 旧蟬之葉店御注文紫襦代方ニ金式面受取申候向右紫襦此葉同人口ニ而御送り申上候向御入手可ヒ下候。葉店御渡ヒ下奉願上候。尚また外ニ彦太郎様之御注文紫襦代銀百文御送り申上候向是又御入手可ヒ下候。

一 前冬も申上候御上様之御下金之義も色々申上候得共何分御納入無之、尤昆助殿四月廿八御地罷下候事ニ相成候向、其節委細ニ御頼申上候事ニ治定仕候。尚口同人々も未及申上候答ニ御座候、左様御承知可ヒ下候。

一 尊者様之差引尻義色々取なしも仕候得共何分御納入無之私之引合方も手のふき候様こと申誠ニ未面可仕候。尤一昨々年も右差引尻之方入金相成不申候故主人仰も無理にも無御座候。殊ニ此葉私罷越候節松山殿立寄候処先年之賦金百兩預り相成候分此葉右金子御返消申上度候而利足附金子ニ有無御座候得共、御主家ニも不慮成御端難之御場合故ニ御要加として外ニ五拾兩奉差上候向、私ニ受取吳候様ニと申候向無異義都合百五拾兩受取申上候。

尚御自分申分ニハ右百五拾兩奉差上候得共歸國之上ニ而主人不承知ニ御座候得者何様共担心へ申候様ニ紙面ニモ口裏ニモ申參候処、主人ニも厚御請可ヒ成候而誠ニ御口可ヒ成候。右様金子ケ少々金子ニハ御座候得共大目立候故ニ御地返事ケ誠ニ不実ニ相見へ申候向私義も誠ニ不働相成何共御申訳も無御座候。此配可仕候。此段御賢察可ヒ下候。委細義者御挂懸ノ上ニ而御物語申上候。

一 玉砂糖蜜焚込等義前番差直段々々々安ク候得共売ばん下り参り不申候。先ニ御見切売捌可ヒ下是奉願上候。尚私義近々出立可仕候而船五ニ而罷下り候向ニ御座候向其節者宜敷奉願上候。尚委細之義者久左征門殿と御聞取可ヒ下候。

一 出立之前ニハ家内共迄も誠ニ結構成品御送りヒ下以誠賄有は合奉仕候。尊御礼申上候向下俥左様思召可ヒ下候。

尚御家内孫へも乍俥宜敷御返立可ヒ下奉願上候。

右御承旁々如斯御座候。恐々謹言

未正月廿五日（甲辰六）

かのや吉兵衛

滝屋善五郎様

彦太郎様

注①黒石が弘前藩か判然とはいはいが安政五（一八五八）年現在で、銭屋の津輕藩に対する債権は一万四千百

六十五兩であつた事が知れる。國史研究四七号所收地
稿9号、錢屋吉太郎書狀参照。

②この項では錢屋主人が釈放された事に対する御祝と
して、滝屋の代理、久左江村が、加納屋吉兵江の機転に
よつて、主家吉太郎と吉助にそれそれ酒三升と糖一置
づの差出した事が語られる。當時の商人道の在り方が
うかがえる。

(11) 錢屋吉兵江書狀

此度市藏指下候ニ付追啓申上候。

然者御上向御調達金之義細々主人へ御咄合仕候處、段々
御世話可ヒ下候趣大ニ説居申候。乍併主人了簡とハ余程
重申候ニ而彼是申居候義も御座候得共、御上向御物入之
御場合等一々申立此間中色々骨折居申候。尤店中も取入
大体に仰付通ニ承知之所為致申度と奉存候。此段御内存
置可ヒ下候。然所此度主人手前指かゝり大金入用之義
出来申ニ付態々市藏指下シ由候間、格別御願込ヒ下同人
へ至子千兩御渡し可ヒ下様奉願上候。尤跡仕抹方之義ハ
私倉度被仰付通取計申度候間左様御承知可ヒ下候。尚委
曲ハ引続私罷下申候間其節御咄可申上候。

一 貴君様差引荒之義も此間吉助殿并ニ私兩人ニ而色
々申入候處兩人為御任可ヒ下候間前口罷下候上ニ而未々
御相談申上度候。此度貴君様御廻合金も一集ニ為御登可

ヒ下候。此段左様御承知可ヒ下候。

一 ① 平内出材木六千石分者貴店様ニ而御売私可ヒ下主人
手前金子ニ而入金可ヒ下候様御願申上候。尚殘金義も別
段申上候通り私共罷下り候上ニ而款計仕度ト存意御座候
間左様思召可ヒ下候。余者吉助も委曲申上候間宜敷御南
有可ヒ下候。右者用々此地斯御座候。恐々謹言

未正月廿九日(安政六)

② 錢屋吉兵江

滝屋善五郎様

注①このヒバ材六千石は黒石領平内山出材一万五千石
の内で、滝屋が同藩の總詰により現金一千兩の引当て
として入手したものだ。この事情は滝屋文書(県立図書
館蔵)にくわしい。

③ 加納屋と同義